古湲禅師試頌及び以呂波囮をめぐって

古田紹欽

偶々のこと、『古湲蓮禅師試頌』の一書を繙く。「寛永七年丁丑之春二月吉日、製本流通、摂津順慶街第五次、渋川清右衛門、高麗橋第一街、浅野弥兵衛」の刊記をもつ。巻末に「平城大智禅院蔵版」とある。「古湲（谿）蓮禅師試頌」に、試頌附刻「以呂波囮序」と「以呂波囮」の本文を付して一巻をなす。その「序」は柳里恭即ち柳沢淇園の撰である。淇園は郡山藩の碩学として知られ、仏典、医薬にも通じ、音律にも詳しく、書画にも広く趣味をもっていた。この一巻の書が刊行になるについては、淇園の識見に負うものが少くなかった。

ここに敢て、世に余り知られることのないこの一巻の書にふれていうのは、淇園が世に知られることのないこの一巻の書の著者の存在を、世に現わし遺そうと意図したことを、今こゝに重ねて踏えてのことであり、ついては白隠の活躍した同時代に、鄙遠の地に埋れてこの人のあったことを改めて云いたい。

では、古湲蓮禅師とはどういう人であったろうか。その伝について僅かに知り得るのは淇園が上記の「序」にあって、濃州郡上藩の城南にあった慈雲山華厳寺の住持であったことをいっているにとゞまる。城南というのは郡上八幡城の南というのであろうか、今はその寺はない。この古湲に異常なまでに関心を深めたのは、その城下の臨済宗妙心寺派の古刹の慈恩寺は、自分が出家得度した授業寺であり、その地縁によってであり、この地に古湲という隠れた学僧があり、その門下にまたすぐれた学識者が出でていたことである。そしてその学問の上に淇園との交渉があったと

いうことである。いつかこの廃寺となっている華厳寺について、郷土史料の上に調べたいという念願をもつ。或はこの古溪について、何等かのことが明かになるかも知れない。

古溪の「試頌」が世に遺ったのは、いつにその門下の守詰が、それを筆に記しとゞめたことによったのである。尤も「試頌」の名称は守詰が没して後に附されたものである。古溪は自からの語を世に遺そうとする考えはなかった如くであり、従ってその語録は存すべくもなかった。守詰が没してこの「試頌」の成った所以が、守詰と同門の者と思われる者の手によって書かれ、それをこれの前書きのようなかたちで、「試頌」の冒頭に記しているが、そのなかで守詰が宝暦の初め江戸より美濃に帰り、一日師の古溪に侍した際、諸山の尊宿が提唱講説をなしているのを見るのに、偏に異国の宗匠についてのみその機縁を頌していて、我国の名徳についてそれがなされていないことを思い、切にその頌を乞うた旨のことをいゝ、この「試頌」の成った由来をいっている。このことは或は『碧岩録』のような書が、中国にあって撰述されているのを鑑み、我国にあっても名徳の機縁を頌するものがなくてはならない筈であり、師によってその先鞭をなして頂きたいというのである。古溪は止むなくこれに応じたのであるが、この「試頌」は若し守詰が没することがなかったならば、遺存する「試頌」を遙かに越えて、或は大部のものになったであろうが、それが果される因縁は不幸にして絶えた。遺存する「試頌」を見るにつけ、古溪の学識の尋常でないことを思うにつけ、それが残念でならない。遺存する「試頌」は、「斑宮達磨」、「元祖脱落」、「覚阿吹笛」、「大明治妖」「道本参方」、「了愚揶揄」、「関山金翅」、「月庵風燭」「天真破鐺」、「大空性壊」、「玄翁敲石」、「覚隠擲劔」「聖一説示」、「愚中柑栗」、「金厳契語」の十五頌にとゞまる。「斑宮達磨」は斑宮即ち聖徳太子が、我国にインドから中国を経て来至した遠磨に、大和の片岡で遇われたという時に、太子と達磨との間にあって相互によまれたという歌にふれて、頌はよまれているが、古溪のいう禅は聖徳太子より始まるものであることを、まづ云わんとしているやに窺われる。そして「元祖脱落」は道元が入宋して、天童山の如浄に参じ、「身心脱落　脱落身心」の法を伝えて帰国したことの意味を頌し、ついで覚

阿の禅にふれて頌している。覚阿は栄西に先んじて、臨済禅を我国に伝えていて、道元が曹洞禅を伝えたことに対して、覚阿をいっていることは、古溪の一見識と見られる。ついで「大明治妖」の大明は大明国師無関普門のこと、「道本参方」の同本は大覚禅師の法嗣の同原同本のこと、「了愚揶揄」にあっては月船琛海の法嗣鈍翁了愚のこと、「関山金翅」の関山は妙心寺開山関山慧玄のこと、「月庵風燭」は大応国師の法嗣の水月老人月堂宗規のこと、「聖一説示」にあっては聖一国師のこと、「愚中相栗」は入明して即休契了に師事した愚中周及のこと、いづれも臨済禅の祖師の逸事行状にふれていい、「天真破鐺」にあっては、通幻寂霊の法嗣天真自性について、「大空性壊」にあっては崇芝性岱の法嗣大空玄虎について、「玄翁敲石」ににあっては峨山韶碩の法嗣の玄翁玄妙について、それぞれ曹洞禅のそれにふれて頌している。各頌の前には「挙す」として、『碧岩録』に充てゝ云えばその「本則」に比せられる語を、それぞれに付す。併せて十五則をなすが、そこには、臨済、曹洞を併せた日本禅の特質ともいうべきものを挙揚せんとした意図があったやに窺われる。

例えば「大明治妖」にあって「挙す」といゝ、亀山上皇の龍山の離宮に妖魅が現れて朝議紛紛たるものがあり、上皇の詔を受けて無関普門が離宮にあって禅坐すると、已後はそれより妖事は永く息んだことについて、「頌して曰く」とし

　檻前日暖かにして花の開くこと早く、屋後雲深くして月の出づること遅し、這裡何ぞ須いん妖忸を説くことを、
　安然たる坐臥は清時を送る

と、よんでいる如く、その頌するところ、古溪の文才の並々ならぬものを窺い知ろう。もう一つ「大空性壊」について云わう。

　挙す、大空の虎禅師、崇芝和尚に参ず。衆に随って弁道すること二十余年なり。一日芝問うて曰く、世界壊する時、この性不壊、作麼生が会す。虎曰く、世界壊する時、この性俱に壊す。芝曰く、意趣如何ん。虎曰く、畢竟

空なり。芝は驀面に一掌を與う。虎当下に契悟し、乃ち起って礼拝す。芝曰く、爾は什麼の道理るか見る。虎は禅牀を掀倒して出づ。芝は冐可印付す。頌して曰く、此の性と世界と、畢竟して壊すや壊せざるや、傷むに堪えたり、諸禅和は文に依って妄りに解を生ずることを

と、いっている。古渓は思うに臨済、曹洞の教団の上の禅に拘わることのない一自由人として、美濃の一貧寺に悠然として境涯を送っていたかと見られるが、「元祖脱落」に道元をもって祖といっている所から考えるに、或は、曹洞禅を嗣承する人であったとも見られる。ただその法系を今はただすことは出来ない。

八幡城の城下町には各宗の寺院が殆んどあり、一方に臨済宗妙心寺派の慈恩寺があることから、古渓の住した華厳寺は、曹洞宗ではなかったかという推測はある程度成り立つ。

本「試頌」については、古渓門下の守詰、「以呂波囮」については守哲、その二人があり、それを併せて、一書が成るについては、二人の筆受に負うものがあってのことであるが、不幸にして古渓に先んして二人とも没した。この二人が歿した後も淇園が古渓との交りを続けて深めるものがあったかどうか、淇園の側にこの古渓のことが記録されるものがあればと望まれるが、古渓の側にあっては、華厳寺も廃寺となって、記録を探索する術にない。

淇園は守哲とは親しい間柄であったことは、「以呂波囮序」に述べていることによって知られ、守哲の出生にふれてもいっていて、郡上藩主金森兵部少輔の臣、鳥山氏の男として生れ、幼にして聡敏、八才にして出離の志を発し、十一才の時に華厳寺古渓の下に出家受戒したという。十四五才に迨んで経律及び詩史の書を読み、その人となりは沈黙静慮、言を発すれば必らず大に、必らず当るものがあったといい、淇園とは早くから友情を結ぶものがあったことをいっている。このことは恐らく、淇園は早くから古渓を識り、古渓を通じてまた守哲を識ることになったのではなかろうか、そして守哲が南都に学ぶことになり、その際は守哲は淇園の家を屢々訪ねることがあり、共に禅を談じ、経を講ずることが徹宵にまで及ぶことがあったといっている。その頃、淇園は守哲のことを上座と呼んでいて、守哲

は禅界に対してすでに一見識を懐くものがあり、上座のことをいうのに、上座はつねに「今の禅を譚ずる者は、不立文字を以って標幟を立て、腹裡に貝葉無し、多くは没字碑に渾す」といって、仏教の学問に欠くところがあるとし、一方「貝葉を取る者は、名目階級を以って幢竿を建つれども、満腔に禅無し」といゝ、「総て繫驢橛に似たり」といって、共に活作畧を欠くとし、教禅は一つでなくてはならぬということ、そして、教禅の一方の教えに拘束されてはならないことをいうに併せて、温衣飽食して棒喝を乱りにし、自己反省を疎ろかにして鬼窟裡に活計をなしていることは、慨嘆の至りであるといっていることをいう。上座のこのような言には、淇園も同感するものがあったに違いなく、こうした談に及んでは日も亦足らずということであったであろう。そうした上座もいつしか病に犯されるところがあり、淇園の家を訪ねることが次第に遠のき、宝暦甲戌四年二月初になると、上座の淇園への音問が絶えた。淇園はその五月に郡上に至り、華厳寺に古溪を訪ねて上座がその歳の仲春に染病、忽焉として逝ったことを、初めて知ったのである。古溪は上座の遺篋から一帙の書を取出し、その帙上にこれを柳公美に寄すと記されていることから、これが淇園に贈られた。淇園はこの一帙を手にして潸然として涕涙し、言うべき語がなかったと自からいっている。帙を開くと三冊があり、これがその「以呂波囮」であるというのである。この「以呂波囮」は、「韻撮」ともいったというが、それは帙上にそれが記されていたものと思われる。淇園はこの一帙を手にして、今更ながら上座が俊傑の士であったことを感嘆するものがあったが、その書を懐にして帰宅し、展転熟読するに、その文の簡、その用の広きことに驚くと共に、この一帙が虫鼠によって失われることを恐れ、これを上梓することを企て、古溪にその許可を求めたが許されなかった。荏苒として月を歴たが、「今余は之を梓する」と、淇園は自からの決断によって、これをなしたのであるがこのことについて、その序に「只だ恐る師の三十棒を喫することを、吁矣」と、文を結んでいる。時に「宝暦乙亥五年春三月」と刊行の年月を誌していて、上座の没た一年後にそれが成ったことをいっている。そしてこの刊本が製本流通になったのは上記の刊記に見えるが如く、その二年後ということになろうか。敢て「製本流通」といっている

のは、その意味をいっているものと解されよう。ところで一帙三冊といっている三冊が、上梓になった「以呂波囮」のそのすべてであったとは考えられず、上座の遺著というべきものが、この囮の外に三冊中には恐らくあったのではなかろうか。

ところで、その「以呂波囮」であるが、その冒頭に「一居禅師口授、侍者守哲筆受」と記されていて、一居禅師即ち古湲の口授したものとし、守哲は単なる筆受者となっている。このことは、古湲と守哲との合作ということに、解していいのではなかろうか。淇園がその序において、守哲の学識、識見について敢ていっていることも、そのことを窺わしめるようにも思える。この「以呂波囮」にいっている仮字と華音との問題は、仏典や禅録を返り点、送り仮名を付して読んだりする場合、それが混合して読まれるにつけ、如何にそれを正しく読むべきかについて、まづ以呂波のもつ音を、華音の上に併せ知るべきであるということを、提言しているのではなかろうか。このことは自から頌をよむ嗜みを古湲は殊にもち、守哲もまた詩文に通じていたことを思うと、読む上にあっての音律の問題は極めて重大であった筈であり、それがこの一書をなしたものと考えられ、この一書を見た淇園が、この書のもつ意義を重視し、刊行までなして世に遺そうとしたことが理解出来ないわけではない。因に淇園は、この書の刊行になった宝歴七年の翌歳の九月五日、五十三才で歿した。古湲の「試頌」のその「試」には、以上述べたようなことが、古湲自からの試みとされているものがあったと考えられるが、それを明かに知るには「試頌」は遺されたものが余りにも少ない。終りにここでもう一度「斑宮達磨」の頌にふれよう。

道う説く親しく香至の家よりすと、梁皇魏帝他を知らず、西帰八十六年の後、東渡相逢う二首の歌、冨水流れて入(かえ)して尚を遠く、斜陽影を弄して影婆婆、然も棺木に衣履る留むと雖も、那箇か本来の胡達磨

聖徳太子が大和の片岡にあって達磨大師に出会った時、太子が「支那出るや片岡山の飯に飢へて臥せる旅人哀(あわれ)親無し」とよまれたのに対し、大師の反歌に「いかるかや、とみの小河のたえばこそ、我が大君の御名を忘れめ」があっ

たという。「棺木衣履を留む云々」は、大師没して片岡山に葬られ、他日その墳を開くに、ただ衣履をその中に留むるのみであったと伝える。ここに上記の二首の歌のことをいっているが、古湲はこの二首の歌を、恐らく華音にうつすものがあったであろうが、それを知ることの出来ないのは、残念といわなくてはならない。ただ巻末に、仮字を華音にうつした作例を付す。『古今集』の序に「そも〳〵歌のさま六つなり、からの歌にもかくぞ有るべき」とある「その六くさ」を引いて、「一」つにはそへ歌として、

なにはづに　さくやこの花冬籠り　今ははるべと　咲くや　この花

とあるのを、

ナニハヅニ　サクヤコノハナフユゴモリ、イマヲハルベトサクヤコノハナ

と仮字で現わし、それを華音に充て、

捺泥宓治泥、沙孤鴉哥揶発捺、孚囿鶴磨釐、伊馬阿発児鷺禿、沙孤雅哥揶発捺

とし、「二つにはかぞへ歌」、「三つにはなずらへ歌」、「四つにはたとへ歌」、「五つにはたゞごと歌」、「六つにはいはひ歌」とあるそれぞれの歌を仮字で現わし、それに華音をそれぞれに充てゝいる。その一々をこゝでは挙げないが、かぞへ歌は賦に、なずらへ歌は比に、たとへ歌は興に、ただごと歌は雅に、いはひ歌は頌に当ることを、古湲はいうまでもなく踏えていっているのであり、こゝに華音を配しているそれぞれの字音が、音韻の上にあることを、恐らく古湲は考慮するものがあったであろうが、その点については憾感ながらそれをここで確めていうだけの知識をもたない。その「六くさ」を結ぶのに

右ノコトバノゴトク華人ニ唱ヘ呼シメン、トオモハヾ、左ニ写シアル用法ノ通リニ、書付渡スベシ、是マタ和国ニテ文章ヲ作為スル者ナドノ不レ可レ不レ知之事也

といって、自からが充てゝいる華音をもってすれば、華人にも、『古今集』によまれている歌の歌たるものの意味が、

音韻の上に伝え得るというのであろうか。

こうした古湲の発想は、『万葉集』が、日本語を漢字でもって記していることに、或は触発されるものがあってのことではないかと憶側するが、文字通りそれは憶測に過ぎない。それはともあれ、古湲は和歌にも少なからず関心をいだいていたであろうことは、充分考えられることであり、このことはまた守哲にあっても同じくいい得ることではなかろうか。

以呂波囮

一居禅師口授　　待者　守哲筆受

假字華音	和讀通
。い　伊。	以　伊。夷。異
ろ。　碌。	呂　盧。爐。論。路。露。漏
。は　發。或用跋。又捌。下倣此。	波　頗。幡。盤。婆。巴。半。播。皷
。に　泥。	仁　人。而。爾。耳。貳
ほ。　訶。或婆。又剝	保　褒。寶。本。甫。浦
へ。　歇。或蹩。又瞥。	皿　邊。陛。遍。閉。倍。珮
と。　禿。或獨	土　登。東。刀。台。騰。途。徒。等。斗。妬。鄧。度。渡。耐
ち。　職。或直	知　治。馳。遲。恥。智
。り　釐。	利　梨。離。里。裏。理
ぬ。　。笯	奴　駑。努。怒

る。兒。
を。阿。
わ。宓。
か。葛。或。溘。
よ。郁。
た。他。或。逮。
れ。歷。
う。梭。或。續。
つ。咨。或。治。
ね。聶。
な。捺。
ら。辣。
む。姥。
う。烏。
る。依。
の。挪。
た。獲。
く。孤。或。苦。
や。鴉。

留。流。樓。累。傑。縷。類。屢
遠。恩。億。意。憶。乙。越。
和。倭。王。徃。話
加。歌。柯。舸。訶。軻。伽。閑。鵝。俄。可。我。箇。介。賀。餓
與。譽。余。餘。預。豫
太。當。多。他。陀。堂。黨。拖
列。連。攣。鈴。禮。戀。例。戾
曾。蘇。疎。層。祖。楚。素。贈
門。都。通。圖。荒。對。豆。突。
禰。年。念。涅。
奈。南。那。難。儺。攤。娜。納。
良。羅。螺。來。邏。賴。樂。
武。无。牟。舞。務。夢
于。烏。宇。有。右。羽。雨。禹。汙
爲。威。圍。違。委。遺。謂。位
乃。能。農。濃。迺
於。淤。雄。穩
久。俱。宮。空。愚。矩。苦。婁。究。句。貢。具。遇
也。耶。爺。野。夜。射

。ま　馬
け。決。或（ケ）鰹。
ふ。孚。或蒲（ヲ）又普（ヲ）
。こ　哥。或鶴（ヲ）切曷各，
。ゑ　耶。
。て　的。或埕（ヲ）
。あ　遏。
。さ　沙。或雜（ヲ）
き。吉。或伎（ヲ）
。ゆ　囿。
め。蔑。
み。彌。
。し　識。或石（ヲ）。
ゑ。葉。
。ひ　虛。或皮（ヒ）又筆（ヒ）。
。も　磨。
。せ　奢。或舌（ヒ）。
す。斯。或辭（メ）

末　麻。滿。磨
計　該。警。希。開。解。遣。穢。氣。礙
不　扶。風。浮。敷。府。普。輔。婦。布。賦。步。富
己　姑。孤。居。胡。古。擧。許。巨。語。顧。固。據。馭
衣　緣。延。穢。叡
天　傳。亭。提。底
安　阿。婀。哀。庵。愛。案
左　沙。娑。差。佐。作。社。散
幾　歸。祈。岐。疑。儀。基。紀。喜。枳。鬼。企。伎。寄。貴吉。
由　油。遊。猶。踰。愈。妙
明　梅。咩。免。命。面。賣。昧。謎。妹
美　彌。微。未。味
之　師。斯。思。私。姿。尸。新。時。旨。璽。志。至。嗣
惠　榮。營。永。慧。衞。會
比　飛。非。肥。毗。俳。眉。鄙。妣。祕。備。避
毛　謀。謨。母。茂
世　施。西。前。是。勢
寸　須。酒。數。壽。受。種。守